

# 大豆品種「タチナガハ」と「アキシロメ」の次位別開花・結実習性に及ぼす播種期の影響

誌名	香川県農業試験場研究報告
ISSN	03748804
著者	藤田, 究
巻/号	46号
掲載ページ	p. 77-78
発行年月	1995年3月

短報

## 大豆品種「タチナガハ」と「アキシロメ」の次位別開花・結実習性に及ぼす播種期の影響

藤田 究

キーワード：アキシロメ，開花習性，結実習性，次位別分類，大豆，タチナガハ，播種期

Effects of Seeding Times on Flowering and Seed-setting Habits with Reference to Raceme Order in Soybean cv. "Tachinagaha" and "Akishirome".

Kiwamu FUJITA

Key words: Akishirome, Flowering habit, Raceme order, Seeding time, Seed-setting habit, Soybean, Tachinagaha,

### 緒 言

香川県における大豆品種「アキシロメ」の播種適期は、6月中旬～7月上旬である<sup>2)</sup>が、梅雨期の降水量が最も多い6月下旬～7月初めを避けるとすれば、6月中旬と7月上旬の2つの時期が考えられる。しかし、「アキシロメ」の生育様相は、6月中旬播と7月上旬播ではかなり異なり、6月中旬播では過繁茂となって倒伏や蔓化しやすくなることが認められている<sup>2)</sup>。

本報では、生育特性の一つとして、品種や播種期によって変化することが知られている開花・結実習性<sup>1, 4, 5, 6)</sup>に着目し、中生の奨励品種「アキシロメ」に加えて大豆奨励品種決定試験で有望であった早生品種「タチナガハ」を供試し、6月中旬と7月上旬の播種期の違いが次位別開花・結実習性に及ぼす影響について検討した。

### 材料および方法

#### 1. 栽培条件

試験は、1990年に農試圃場において行い、品種「タチナガハ」と「アキシロメ」を供試し、6月13日（早播）と7月6日（普通播）に播種した。栽植様式は早播では畦幅70cm×株間20cm（栽植密度7.1本/m<sup>2</sup>）、普通播では畦幅70cm×株間17cm（栽植密度8.4本/m<sup>2</sup>）とし、1株2本立とした。施肥は基肥として1アール当りN：

0.2kg, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>：0.46kg, K<sub>2</sub>O：0.5kgと苦土石灰10kgを施用した。中耕培土は1回行い、病虫害防除及び畦間灌水は生育に支障をきたさないように適宜行った。

#### 2. 次位別開花数・結実習性の調査

花房の次位別分類については、黒田ら<sup>3)</sup>の方法より行った。すなわち、葉腋に最初に着生する花房を1次花、茎頂部に着生する花房を0次花、そして1次花の両脇に着生する花房を2次花、さらに2次花の両脇に着生する花房を3次花と定義した。なお、本報告においては、2次極枝上に着生する花房はすべて2次花とした。

開花調査は、生育中庸な4～6個体（1株×2～3反復）を供試し、開花始めから花房の次位別分類に基づいて0, 1, 2次花に分けて行った。なお、3次花も観察されたが、開花の有無が不明瞭であるため、開花調査の対象としなかった。また、開花調査を行った個体について、収穫後に次位別に稔実英数及び不稔英数を調べた。

### 結果および考察

#### 1. 開花習性

日別に見た開花数の経時的推移を図-1, 2に示した。大豆の開花習性は、一般に最初に1次花の開花が始まり、その後0次花、やや遅れて2次花の開花が観察される<sup>3, 7)</sup>ことが知られているが、本試験において品種及び播種期を変えても同様な結果となった。

これについて品種別に見ると、「タチナガハ」は、「ア

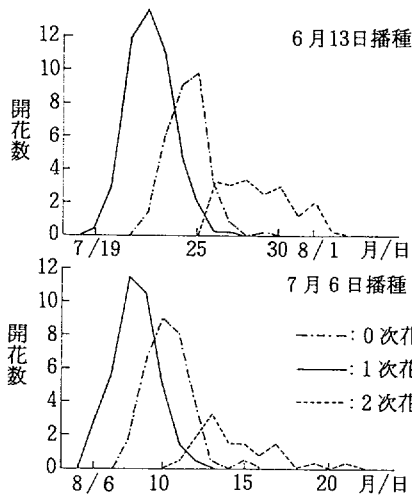


図-1 「タチナガハ」における次位別開花数の経時的推移

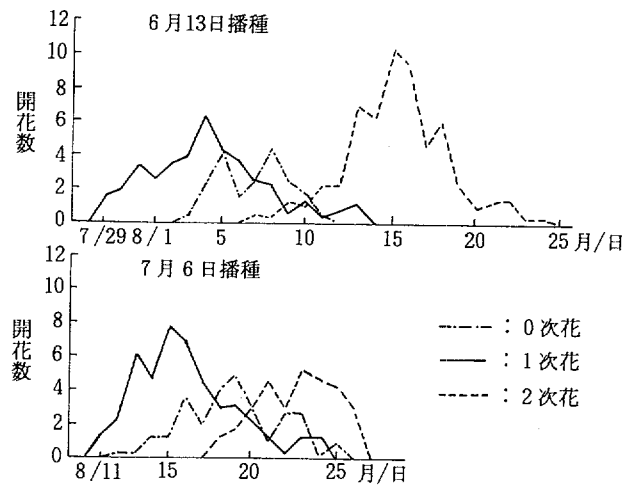


図-2 「アキシロメ」における次位別開花数の経時的推移

キシロメ」に比べて各次位の開花ピークが大きく、明瞭であり、その期間が短かった。また、播種期別に見ると、「タチナガハ」では早播することによって開花数がやや多かった以外は、大きな違いは認められなかったが、「アキシロメ」では、早播の方が各次位の開花期間が長くなり、1次花の開花ピークが小さくなり、2次花の開花はかなり遅れ、そのピークは大きくなった。

2. 結実習性

両品種の各播種期における次位別結実率を表-1に示した。「タチナガハ」の早播は、普通播に比べて各次位ともにやや低い程度であったが、「アキシロメ」の早播では、普通播に比べて0、1次花の結実率が特に低いこと

表-1 次位別結実率

供試品種	播種期 (月/日)	結実率 (%)		
		0次	1次	2次
タチナガハ	6/13	21.5	32.8	68.5
	7/6	26.7	50.4	70.8
アキシロメ	6/13	12.9	28.5	48.9
	7/6	29.8	53.3	63.6

注) 結実率は、総実莢数÷開花数×100 (%)とした。

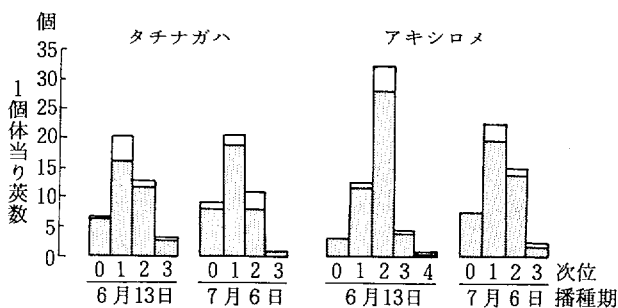


図-3 次位別総実莢数及び不稔莢数  
注) 総実莢数、不稔莢数

が認められた。

次に、次位別稔実及び不稔莢数を図-3に示した。「タチナガハ」では、両播種期ともに、全莢数の内、1次花に由来する莢数の割合が最も多く、1次花主体の収量構成であった。一方、「アキシロメ」については、普通播では1次花に由来する莢数が最も多く、1次花主体の収量構成であったが、早播では2次花主体の収量構成であり、播種期の違いによって収量構成の変化が認められた。

以上より、「タチナガハ」は播種期の違いによって開花・結実習性がほとんど変化しなかったが、「アキシロメ」ではかなりの違いがあり、播種期反応に品種間差異があることが認められた。そして、「アキシロメ」は早播によって0、1次花の結実率が低下し、極枝を伴って2次の栄養生長をする2次花<sup>7)</sup>の割合が高まるため、過繁茂となって倒伏や蔓化が起こりやすいと推察される。

引用文献

1. 藤田 究・西山芳邦 1992. 日作四国支紀29: 27-34.
2. 香川県 1994. 大豆栽培指導指針. 23-25.
3. 黒田俊郎・大石保之助・木下 収・栗原 浩 1979. 日作紀48(別1): 43-44.
4. 黒田俊郎・山下昌秀・齊藤邦行 1993. 日作紀62(別1): 72-73.
5. 西山芳邦 1985. 香川農試研報37: 43-47.
6. 白岩立彦・鳥越洋一・栗原 浩 1981. 日作紀50(別2): 53-54.
7. 鳥越洋一・進士 宏・栗原 浩 1982. 日作紀51: 89-96.